

教育シンポジウム

1. 「医学英語の向上を目指して」学生のための Clinical Pathological Conference での医学英語

宮本 勝一

近畿大学医学部内科学教室 (神経内科部門)

平成18年度に医学部有志学生を対象とした Clinical Pathological Conference (CPC) が開始され、今年度で早や4年目に突入している。主な教材として New England Journal of Medicine の Case Report を用い、医学知識の習得を通じた医学英語の向上を目指している。

学生に行ったアンケートでは、教材のレベルが少し難しいという指摘があったが、教員が医学的な説明を適宜付け加えることによって、学生が理解し得るレベルになっているものと考えている。教員から見て、学生の準備状況は良好であり、十分な学習意欲を感じ取っている。また学生から見ても、教員の熱意を評価しているというアンケート結果であった。開催頻度は学生、教員双方から希望の多かった隔週としたところ、準備期間が増したためか、学生からはより具体的な内容の質問が多く出るようになった。予習期間で解決できなかった疑問点は、開催日以前に教員に質問することにより、事前にお互いの準備が進むことになるため、当日は充実した討論ができるようになった。時間も1時間に凝縮して行

っているが、適度な集中力を保つには適当な長さであると思われ、いかに時間内に疑問点を解決し、要点をまとめあげるかという良い訓練ができていているように思う。

今後の課題としては、さらに多くの学生が参加できるような内容の充実があげられる。当初、3学年や4学年を対象とした勉強会であったが、本年度は1学年の参加者も多く、大変喜ばしい状況である反面、基礎的な医学知識を理解していることが前提であるため、彼らにとって難解な内容であろうと予想される。現在のところ、事前に上級学生が下級学生に対して医学的解説を補足して克服しているが、教員としては、幅広い学年の学生が一様に受け入れ易い内容にする努力が必要である。名目は「学生のための」勉強会であるが、教員も刺激を受け、時には勉強し直す良い機会になっており、「教員のための」勉強会でもある。これからも学生と共に、我々教員もスキルアップしてゆくことが大切であり、本勉強会が末永く継続されることを切望する。

2. 学生クラブとしての英語教材による Clinical Pathological Conference の意義

森 英輝

近畿大学医学部4学年

CPC クラブでは隔週火曜日午後6時から約1時間、主体は3、4年生ですが2年生～6年生まで幅広い学年の学生が集まって英語教材を使つての Clinical Pathological Conference (CPC) を行ってきました。神経内科、膠原病内科、血液内科、腫瘍内科、消化器内科、代謝内科など様々な科の先生に選んで頂いた英語の教材(論文)を、学生がまず予習として読んでおき、CPC 当日疑問点などを解決していくという流れで行っています。参加した学生20人に10項目にわたるアンケートを2008年12月に行いました。これらのアンケート結果から得られた CPC の意義や問題点を報告します。

アンケート結果は参加した学生の95%が有意義であった、90%が学習意欲を刺激されたと答えている反面、50%の学生が教材・講義のレベルが適切ではない、負担になったと回答しています。先生が熱心に教えてくれているということを学生は感じていますが、半数の学生がその内容が学生にとっては難しすぎ、適切でないという回答しています。教材・講義のレベルが4、5年生を主な対象としているために、

下の学年にとっては予習段階で分からない事が多すぎて負担になり、当日の CPC も先生の説明が難しすぎるのが原因です。学年が異なるのでどの学年にレベルを合わせるのかは難しいと思いますが、毎回のテーマや目的を事前に先生と代表が相談して決めて、今回の事例の難易度や予習段階でのポイントなどをメンバーに事前に伝えておくような準備が必要かと考えられました。

アンケート結果により指摘された学年間での知識の差・理解度の差をいかに軽減するかという事に関しては、担当の先生が来られる1時間程前に学生だけで集まり、上級生(主に4年生)が下級生に教えながら一緒に予習するという取り組みを4月から行っています。論文に出てくるような非典型例ではなくて教科書的な典型例を学びたいという意見に対しては、国家試験の過去問などを利用して典型例を学んでから行うようにしています。こういった取り組みにより一定の効果が出てきています。今後もよりいっそう CPC クラブの活動が盛んになっていくように努力していきたいです。